

---

**異説御伽噺 「トゥルーデおばさん」**

神田白兔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異説御伽噺 「トウルーデおばさん」

### 【Nコード】

N0883K

### 【作者名】

神田白兔

### 【あらすじ】

「森の奥には、行ってはいけないよ。森の奥には恐ろしい魔女、トウルーデおばさんが住んでいるから」親の言うことを聞かず、トウルーデおばさんのところに家出した女の子が見た『トウルーデおばさん』とは？異説「トウルーデおばさん」、開幕。

「いいかい？ 森の奥へは決して行ってはいけないよ。あそこには、狼よりも悪魔よりも恐ろしい魔女、トゥルーデおばさんが住んでいるんだ。絶対、絶対に近づいちゃいけないよ」

「ふうんだ。何が、トゥルーデおばさんよ。そんな子供だましにだまされるほど、もう子供じゃないんだから」

女の子は言いながら、森の奥へどんどん足を進めます。

家の手伝いもしなければ、教会にも行かない、自分より年下の子をいじめて泣かせてばかりな、村一番のわがママ娘。今日も、隣の子供をさんざん苛めて泣かせて、それが親にバシッて叱られましたが、女の子は全く反省もしません。

それどころか女の子は、こんなことを言い出しました。

「あー！ もうこんな、ガミガミうるさい家なんていや！ ……決めた！ 私、森の奥のトゥルーデおばさんの家に行って、魔女になる！」

叱りつける両親に、癪癪を起して言ったセリフでしたが、両親は今まで以上に女の子を叱りつけました。

「何を馬鹿なこと言ってるんだい！ いいかい！ あの魔女はお前が思っているようなものじゃない！ あの魔女は、子供をさらっては食べてしまう、恐ろしい魔女なんだよ！！」

両親が叱れば叱るほど、女の子は意固地になり、ついには家を飛び出して、本当に森の奥まで走って行きました。

初めのうちは、村の大人達がいつも子供を脅すのに使う「トゥルーデおばさん」の話など、バカバカしく思い、意気揚々と歩いていましたが、森の奥に進むにつれて、暗くなっていく道、不気味な鳴き声の鳥に、女の子は怯えます。けれど、意地っ張りな女の子は、

いまさら後に引けず、どンドン、どンドン森の奥へ。

すっかりあたりが暗くなり、さすがに女の子も帰りたくなって泣き出しそうな時、森の中に明かりが見えました。

「……本当にあっただ」

冷え込んだ体を震わせて、女の子は早く家の中に入って温まりたいの一心で、明りに向かって走ります。そこに、他人の家という遠慮は一切ありませんでした。

近寄ってみると、その家は思っていたよりもずいぶん大きな家でした。見上げてみると、窓は縦に四つ。どうやら四階建ての家のようです。

女の子が玄関に回り、大きな鴉の形をしたノッカーに手をかけました。

「お嬢ちゃん。どうしたんだい？　もしかして、トゥルーデおばさんに会いに来たのかい？」

「きゃあっ！」

突然話しかけられた声に、女の子は悲鳴をあげました。声は、ノッカーの大鴉から、確かに聞こえてきたのです。

大鴉は、怯える女の子をニヤニヤ笑って眺めて、言いました。

「トゥルーデおばさんに会いに来たのなら、俺の口の輪を持って、ドアをノックしたらいい。そして、ドアが開いたら、四階に行け。トゥルーデおばさんなら、そこにいる」

そう言っ甲高く笑う鴉に怯えながらも、女の子の意地っ張りはこちらでも発揮され、彼女は乱暴にドアをノックしました。

しかし女の子が勢いよくノックしたとたん、ドアが内側に開いたので、女の子は倒れこんでしまいました。女の子が家の中に入ったら、すぐにドアは閉じ、今度はどんなに押しても引いても開きません。

「どうしたんだい？　トゥルーデおばさんはお待ちかねだよ」

ドアの向こうで鴉は楽しそうに、狂ったように笑います。女の子が、やっぱり帰ると泣いても、ドアは決して開きません。

しばらくドアと女の子は格闘し続けましたが、どうやっても開かないドアに諦めて、すすり泣きながら階段を探します。

家の中は薄暗くて足元がおぼつかなく、女の子は壁に手をつきながら、家の中を歩きます。ですが、その壁の感触は異様でした。

ひどく凸凹していて、丸みはあつて、まるで丸い何かを積み重ねて出来たような壁。次第に目が慣れてきた女の子が、目を凝らしてよくその壁を見てみました。

「!?!? きゃあああつっ!?!」

女の子が今まで、手をつけていた壁は、人間の頭蓋骨。それは、髑髏でできた壁でした。

「助けて! 誰か!!」

女の子は悲鳴をあげて、助けを求めて、走りました。

「あつ!?!」

パニックを起して走った女の子は、何かにぶつかって尻もちをつきました。目の前は、何も見えない真っ暗ですが、自分の真上をのぞきこむような気配を感じ、女の子は顔を上げました。

そこにいたのは、女の子の倍ほどある大きさの、闇のような真っ黒な男。全身が人型に切り取ったように真っ黒で、目だけがキラキラと光って、女の子をにらみつけていました。

「いやあああつっ!?!」

女の子はまた悲鳴をあげて、逃げ出します。大きな腕を伸ばして、追いつがるうとする真っ黒な男は振り払い、必死になってやっと見つけた階段を駆け上がりました。

「もおやだあ……、お父さん……お母さん……」

泣きながら二階にたどり着いた女の子に、誰かが話しかけてきました。

「お嬢ちゃん」

優しい声に安心して、女の子は声が出た方に顔を向けましたが、

そこに立っていたのは、大きな包丁を持った、顔も、髪も、手も、全てが真っ青な男。

「おやおや、これはこれはおいしそうな女の子だ」

ギラリと光る包丁に慄いて、女の子は悲鳴すら出てきません。ただ男と同じくらい青ざめて、後退するだけ。

しかし、下がった足のかかどが、こつんと何かにあたりました。

(階段だ！)

女の子は慌てて踵を返して、階段を駆け上がります。

「おやおや上に行くのか？ それは愉快だ」

(もうやだもうやだ！ ごめんなさい！ ごめんなさい！ もうわがまま言いませんから、誰か助けてください！！)

女の子が祈りながら階段を上がり、三階にたどり着く。たどり着いた瞬間、女の子は口と鼻を手で覆った。

そこにはひどい異臭、強い鏝の匂いで充満していました。

薄暗い部屋ですが、女の子はこの部屋の色がわかってしまいました。この部屋は真っ赤、血で染まっていると……

「おいで」

部屋の隅から、誘いかける声が聞こえ、女の子は恐る恐る、そちらに目を向けます。

そこには人の形をした、血の塊がいました。

血の塊は、口を三日月の形に歪めて、女の子に手を伸ばす。

「さあ、おいで。こつちに来て、お前の血をおくれ」

「いやあああつつつ！ 来ないで！ 来ないでえつつつ！！」

女の子は半狂乱になって、腕を振り回して逃れ、階段を一心不乱に上って行きました。

長い階段を必死になって、上がって上がって上がってゆき、女の子はやっと四階にたどり着きます。

「助けて……。誰か……。神様……」

女の子は階段に腰掛け、膝を抱えて泣きました。寒い寒い部屋の外で泣いていると、四階の部屋から、薪火がパチパチとはぜる音が聞こえ、ふらふらと、四階の部屋のドアに手をかけました。

ゆっくり、そっとドアを薄く開け、女の子は隙間から部屋の様子をうかがいます。

暖かそうで綺麗な部屋。テーブルにはおいしそうなクッキーやケーキが置いてあり、女の子は思わず部屋に飛び入りそうになりましたが、暖炉のすぐ傍で安楽椅子に座る人物を見て、息を飲みました。そこにいたのは、口が耳まで裂けて、真っ赤な目をした長い尖った耳の化け物。

女の子の足がガクガク震え、立つてはいられず、また座り込んでしまいました。

「どうしたんだい？ 入っておいで」

部屋から、声がしました。

その声は、あの化け物の声とは思えない優しい穏やかな声。

(ダメ！ ダメ！ 入っちゃダメ！！)

女の子は自分に言い聞かせましたが、まるで何かに引き寄せられるように、ふらりと立ち上がって、部屋の中に入って行きました。

「あれ？」

部屋の中で安楽椅子に座っていたのは、化け物ではなく、小柄でしわくちやの、とても優しいそうなおばあさんでした。

「どうしたんだい、お嬢ちゃん？」

不思議そうに首をかしげるおばあさんに、女の子は目をこすって、何度も確かめました。何度見てもそこにいるのは、ごく普通のおばあさんです。

「……あなたが、トウルデーおばさん？」

「そうだよ、お嬢ちゃん」

「ト、トウルデーおばさんは恐ろしい魔女だって聞いたわ！ それに私、この家でいっぱい怖いものを見たわ！！」

「怖いもの？」

「そうよ！ 玄関で大鴉に脅かされて、壁は髑髏だし……」

「すまんね。私の飼っている鴉は、いたずら好きなのさ。……髑髏？ 暗いから、見間違えたんじゃないのかね？」

「一階には、真っ黒な男がいたわ！」

「それは、炭焼きだよ。無口な男なんだ」

「二階には包丁を持った、真っ青な男が……！」

「あれは料理人だよ。病弱なのさ」

「三階の真っ赤な血の固まりは……！」

「それは屠殺人だよ。仕事熱心だねえ」

女の子の問いに、おばあさんは優しく、諭すように言います。

女の子はその答えにホツとしつつも、おばあさんのいかにも子供に言い聞かす態度に腹を立て、またここでも癩癩を起しました。

「でも、私さつきこの部屋に、化け物がいたのを見たわ！ 耳まで口の裂けた化け物が！」

女の子の言葉に、おばあさんはさもおかしそうにくすくす笑いしました。

「……何がおかしいの？」

「お嬢ちゃん。それは魔女が本当の姿をしていたのさ」

そう言って顔を上げたおばあさんの目は、血のように真っ赤でした。

おばあさんの目を見て、女の子は動けなくなりました。

「ここはね、お前のような傲慢な子供がやってくるのさ。わがママで、守られて大切にされてることを、当然と思っている子供がね」

おばあさんの口は徐々に耳まで裂け、耳も長く長く尖ってゆき、おばあさんは女の子がドアの隙間から見た、化け物へと変わっていききました。

「さあ、わがママが過ぎて、親を捨てて、親に見捨てられた子供。私の為に、光っておくれ」

そう言って、トゥルーデおばさんは女の子の眼前で指を振りました。

すると、女の子の体がみしみし音を立て、変化していきました。体中の水分を失い、皺だらけになって硬くなり、まるで薪木のように……

「ここに来た子供は皆、こうなるんだよ。皆、この暖炉で燃やされるんだ」

「い、……嫌！ 嫌よ！ 死にたくない！！」

女の子は喉が裂けるほどに叫び、枯れ木になりつつある体に全霊の力を込めました。

女の子は体中の力を振り絞って、両手を想いっきり前に突き出しました。

「なっ！？」

ボギツ！ と乾いた音がして、安楽椅子は倒れ、その椅子に座っていたトゥルーデおばさんは、暖炉の中に放り込まれました。

「ぎゃああああっつ！！」

獣の泣き声のような断末魔が響き、炎は激しく燃え盛りました。けれど、次第に火の勢いも弱まり、あとはただ、パチパチと小気味がよく爆ぜる音が響きます。

「……やった。……助かったんだ！」

女の子は飛び上がって喜ぼうとしましたが、どういことか、足が上がりません。

その足は、しっかりと床に根を張っていたのです。

それだけではありません。魔女であるトゥルーデおばさんが死んだのに、女の子の体はしわくちやのまま、元には戻りません。

そして、女の子は気が付きました。

自分が突き飛ばした、トゥルーデおばさん。その人が座っていたその場所に、切り株のような床に根付いた足がそこにあることを……

女の子は、帰ることも、この家から出ることもできず、しわくちやのおばあさんとなり、この家に住み着きました。

親の言うことを聞かず、こんなところに来てしまったことを毎日後悔して、泣いて過ごしているうちに、女の子の目は真っ赤になりました。

そして時々やってくる、自分と同じ傲慢な子供の悲鳴だけを楽しみに生きました。その悲鳴を、ひとことたりとも聞き逃さぬように耳を澄まし、悲鳴が聞こえるにやりと笑い続け、いつしか女の子の耳は尖った形に長く伸びて、口も耳まで裂けてしまいました。

女の子は、自分の姿がずっと昔に見た、「トウルデーおばさん」の姿になっていることに気付かず、今日も泣きながら、愚かな子供を持ち続けています。

(後書き)

異説御伽噺第八弾。またしてもマイナーグリム童話。

原作もバッドエンド。というよりも、バッドにしかしようがない。青髭や赤ずきんのように、助けに来られるとチープに感じるので、ラストを少し変える程度にしました。

最後までこんなマイナーな話を読んでくださって、ありがとうございます。

もしよろしければ、感想、そしてそろそろ元ネタ童話がネタ切れなので、リクエストがあれば善処しますので、お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0883k/>

---

異説御伽噺 「トゥルーデおばさん」

2010年10月8日15時23分発行